

宮崎県自給飼料分析指導センターにみる10年間の自給飼料の利用状況の変化

東 政則 (宮崎県畜産試験場)

Masanori HIGASHI: Change of forage species and using method of Selfsupplying Feed in ten years Service of Analysis Center in Miyazaki Prefectural Office

宮崎県自給飼料分析指導センター発足時の昭和60年度から、平成6年度までの10,208件の依頼分析について、草種・利用型・刈取ステージ・刈取方式・サイロの種類・サイレージの水分とpH・サイレージ用添加剤の使用状況変化を調べ、次の結果が得られた。

1. 草種別割合

当初50%程度を占めていたトウモロコシが、昭和63年度から減少傾向をたどり、平成6年度には24%にまで低下し、変わって「その他」に分類される「イタリアンライグラスとえん麦の混播」やえん麦、野草などが増加し20%程度になった。

2. 利用型別割合

乾草は当初2%程度だったが近年は10%前後に増加した。しかし、年次を通じてサイレージの依頼件数が80%以上と圧倒的に多かった。

3. 刈取ステージ別割合

ソルガムとイタリアンライグラスには、傾向的变化は見られなかった。一方、トウモロコシは初年度のみ黄熟期が54%と最も多かったが、2年目以降は糊熟期の割合が最多で、その割合も増加し、近年は50%以上を占めている(第1図)。

4. 刈取方法別割合

シリンダー刃タイプのハーベスタは、トウモロコシについては年次を通じて60~80%を占め、ソルガムは当初40%程度であったものが、近年は70%程度に増加した。フレール刃タイプについてはトウモロコシは年次を通じて0~2%しかなかったが、ソルガムとイタリアンライグラスは当初それぞれ約40%と約60%を占めていた。しかし、ソルガムとイタリアンライグラスとも近年はそれぞれ約10%と約20%に大きく減少した。モアー刈りは、トウモロコシとソルガムは年次を通じて10%以下で傾向的变化もなかったが、イタリアンライグラスは40%程度から70%程度に増加した(第2図)。

5. サイレージ水分

年次を通じてトウモロコシは71~73%、ソルガムは72~76%で傾向的变化も見られなかったが、イタリアンライグラスは1・2番草とも昭和62年度から減少傾向をたどり、当初70%程度が平成6年度には50%程度にまで低下した(第3図)。

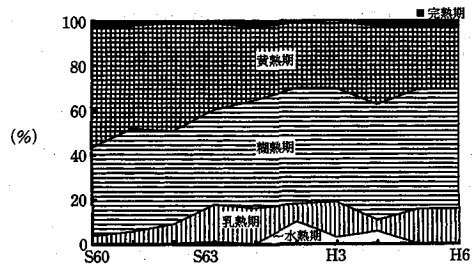
6. サイロ形態別割合

バッグサイロ等のプラスチック素材のサイロの割合が増加傾向を示している。このサイロのほとんどがイタリアンライグラス等の牧草であった(第4図)。

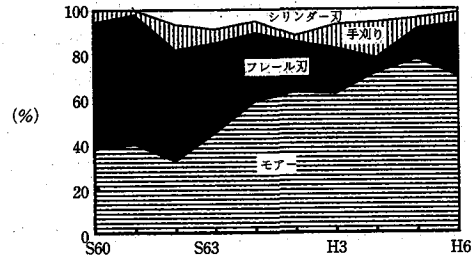
7. サイレージ用添加剤の使用割合

トウモロコシとソルガムに年次を通じた傾向的变化は見られなかったが、イタリアンライグラスは減少傾向をたどり、当初35%から平成6年度には20%程度になった。

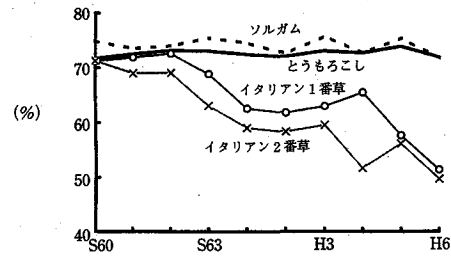
5, 6, 7から、牧草サイレージについては、生産現場ではプラスチック素材のサイロを利用した低水分調製技術が普及していったことが伺えた。



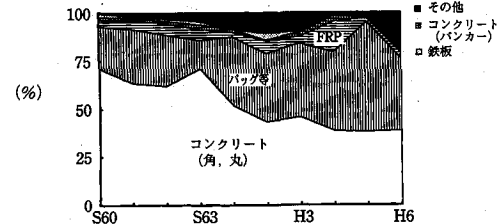
第1図 刈取ステージ(とうもろこし)の変化



第2図 刈取方法の推移(イタリアンライグラス)



第3図 サイレージ水分の変動



第4図 サイロ形態別割合の変化